

熊本県知事 蒲島郁夫 殿

公述者 住所 熊本市

氏名 原 育美

川辺川の流水型ダムに関する環境影響評価準備レポートについて、環境保全の見地から次のとおり意見を述べます。

準備レポートについての環境保全の見地からの意見とその理由

環境影響評価準備レポートでは、川辺川に建設が計画されている貯水容量 1 億 3300 万 t の巨大ダムの建設により、多くの項目において環境影響はあると認めています。しかしながら、その影響については、すべてが楽観的で、過小評価に終始し、その保全対策も科学的裏付けが不十分なものや、実効性に疑問のあるものばかりです。にもかかわらず、ほぼすべての項目において影響を“回避できる”と断言されていることに驚きを禁じえません。

「客観的、かつ科学的な環境アセスをしっかりとやってほしい」との樺島知事の要望にも沿うもので到底ないと思います。

2020 年 11 月に川辺川ダム計画が再浮上した際、国土交通省担当者は、環境アセス調査には数年を要すると発言されていました。しかし、2022 年 11 月に環境アセスの方法が公表され、そのわずか 1 年後の 2023 年 11 月に、早々と準備レポートが公表されるというあまりの速さに何故そんなに急ぐのかと驚きを禁じませんでした。どれほど慎重な調査が行われたのか、考える限り多角的に影響を予測されたのか、厳しく評価がなされたか、不信感を抑えることはできません。短期間の調査と評価で「影響は回避できる」と結論づけることはあまりに無責任です。県民の誇りである清流球磨川と生体系への影響、そして流域の人々の川に対する深い想いに真摯に向き合ってほしいと切に願います。

●洪水調整専用の流水型ダムの流量調整について

流量調整による洪水被害を防ぐ設備として、①確実な流量コントロールを行う機能として「常用洪水吐き」、②大規模洪水時的確に流量を放流する機能として「非常用洪水吐き」、③平時から一定規模の洪水まで流下させる機能として「河床部放流設備」、④様々な流量に対し効果的かつ安定した減勢機能の「減勢工」の 4 つの設備が求められていると説明されていますが、適正に運用できるのかは不透明で大きな不安要素となっています。

・湛水による影響

流水型ダムは、1 年のうち 364 日は水をためずこれまで通りに水が流れるとしながら、最高水位まで貯水位を上昇させる試験湛水期間の日数は不明です。湛水期間を短くする工夫をとして 1

日5メートル水位が低下する放流を行うことで70日間湛水期間を短縮すると説明されています。湛水に要する日数と平常時と同レベルになるまでの放流に要する日数を合わせると法面の山々と樹木類が水没する期間は合計何日になるのでしょうか。その間の河川を流れる水量変化がもたらす生き物への影響が懸念されます。

また、試験湛水時に比べて、洪水時は急斜面の山々から相当量の土砂が流木とともにダム湖に流れ込みことは容易に予想されます。それらが洪水吐き(放流)を妨げ、満水時の緊急放流もできなくなることも想定されます。緊急放流も下流住民にとっては大きな恐怖ですが、放流コントロールできなくなったダムも恐怖以外の何物でもありません。

・洪水調整操作ルールについて

ダム洪水調整地内においては貯水に伴う上昇量を極力抑えたとされていますが、近年の降雨量は予想をはるかにこえています。想定を超える降雨があった場合、調整地内の貯水量に抑えるという操作ルールが通用するのか保証はありません。

・工事の実施期間の水温予想について

五木、柳瀬、渡の3か所で試験湛水期間に水温がどの程度変化するか予想されています。五木では9月～12月の4か月間の平均値が3度上昇、柳瀬でも同程度と予想され、変化は小さいと結論づけられていますが、調査すべきは4か月に及ぶ水温変化が生き物に及ぼす影響です。渡においては3月の水温が極端に下がると予想されています。これらの影響も慎重に調査し、評価されるべきです。

・生態系への影響についてもあまりに軽く評価されています。

ダムサイトで確認された魚類はすべて移動可能となるよう工夫するとあります、まだテストすら実施されていない段階であり、移動を確保できるかは不透明です。慣れ親しんだ生息環境から移動させられた清流にしか生息できない生き物は、数年後には消えてしまうことが予想されます。なぜなら水生昆虫などの親は元居た場所に戻って産卵しますが、戻れないことが予想されることから産卵できず生息数の減少につながる懸念があります。

植物については、工事や試験湛水で、種子植物やシダ植物、コケ類などの生育地点が改変されると予想され、4項目の保全措置が記載されていますが、分布地域や面積の記載がなく、調査実態が不明であり、有効な保全策がどこまで実施できるかも不透明です。気候変動が厳しさを増す中、移植などで保全策を講じられた植物が無事に定着できるか誰にも保証できません。

・濁りによるアユへの影響について

清流川辺川の象徴であるアユと水質について、ダム工事期間や試験湛水や運用後には「川が濁ることもあるが、自然の降雨の際の濁りと同程度であり、放流操作などで対策を行うことで影

響を回避・低減できると断言されています。試験湛水の結果も待たずにどうしてこのように断言できるのか、この点も影響を意図的に過小評価していると思えません。

・絶滅危惧種や希少生物の保全について

絶滅危惧種クマタカについては、極めて限定されたエリア内での調査に留まっている上、「生息環境が失われ、繁殖率が低下する」としながらも、工事の一時的中断や営巣地に立ち入らない等の対策で、影響を回避・低減できると楽観的に評価されていて、この点も影響が意図的に過小評価されていると危惧します。

また、九折瀬洞の特殊な生態系についても、ダム貯水や試験湛水で大きな影響を与えることを認めながらも、試験湛水期間中のみ、入口に擁壁を設置し、湛水後は撤去する。そして代替口を設置してコウモリや生き物の移動を促す等により、影響を回避・低減できる、とありますが、試験湛水期間は相当な日数になると考えられる上に、洞窟内の穴は上に上っているため、水平に飛ぶ蝙蝠の移動はもちろん、他の生き物の湛水期間の移動をどこまで保証できるのか大いに疑問です。移動させるという個体数の把握をどのように行うのかも説明がなされていません。

洞窟の生き物たちは蝙蝠の糞を食べています。洞窟が水につかれば糞は流れてしまいます。高温多湿の洞窟の独特な環境で独自に進化した生態系の価値を守れるのか大いに危惧しています。この洞窟内にしか生息していない生き物も観測されていえることから慎重な対策が絶対必要です。

最後に

国交省は、仮に川辺川ダムが存在していれば、7月の豪雨による人吉市街地の浸水範囲は6割程度減ったとする試算結果を公表しています。このことは「川辺川ダムがあっても、被害をすべて防ぐことはできなかった」ことを認めていることとなります。

洪水時には上流から流れ込んだ流木がダム底部の穴をふさぎ、補修や維持の費用がかかるという指摘もあり、川辺川ダムの総工費や維持費についてはまだ不明のままです。

今一度、ダムの問題点、環境影響の大きさ、危険性も含めダムの是非を慎重に検討してみることが必要ではないでしょうか。慎重さを欠く調査内容を環境配慮としたままダムが建設されれば、川辺川・球磨川では深刻で取り返しのつかない環境影響が発生することを心から危惧しています。球磨川の清流と全国に誇る尺鮎は県民の宝です。2001年に私たちが立ち上げた尺鮎トラストを通じて川辺川の尺鮎を購入された全国の消費者から、これほど美味しい鮎を育てる川辺川の清流を絶対守って！と絶賛の声が届きました。県民の誇りである球磨川の清流と尺鮎に代表される生き物たちがいつまでも守られることを切に願います。